



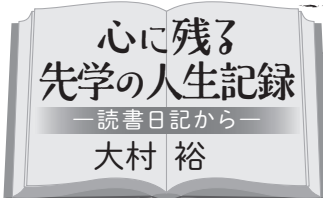
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.241  
2023.10.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第36回

## N・G・マンローと桑原千代子

### —桑原千代子『わがマンロー伝』(新宿書房 1983年)が上梓されるまで—

N・G・マンロー(1863~1942)は、英国・スコットランド出身の医師で、明治~昭和初期にかけてわが国の考古学・人類学研究を精力的に推し進めた在野研究者である。彼が1908年に自費出版した大著『Prehistoric Japan』は、当時、日本の考古学の最も優れた概説書として海外に大きな反響を呼び、米国では1971年と2010年の2度にわたって再刊され、わが国においても1911年と1982年に再刊・覆刻されている。揺籃期の日本考古学界にあって、横浜市三ツ貝塚の調査(1903年)では、トレンチ法を採り入れ、分層発掘をしている点で、先進的な研究者であった(高橋健編『N・G・マンローと日本考古学』横浜市歴史博物館、2013)。

なお1905(明治38)年夏には、神奈川県早川、及び酒匂川流域の砂礫・赤土層から、旧石器類似の礫を採取し、「これらの資料はこの国において旧石器時代人の存在を明確に確定するには十分でないけれども、私はあえてそれらが示唆的だと考える。」としている(『Prehistoric Japan』: pp.41-42)。この所見は後年芹沢長介によって度々紹介されている。

大正時代になると、鳥居龍蔵・濱田耕作・松本彦七郎など新進研究者の台頭についていけなくなったのか、1925年頃にはアイヌ文化の研究に軸足を本格的に移し、数年後、北海道の二風谷に定住。しかしそこに暮らすアイヌの人々の劣悪な健康状態に衝撃を受け、研究活動を二次にしてアイヌの人々に対する奉仕活動に従事する。すなわち医療活動を無償で行なうだけでなく、結核療養に関わる生活指導等を行なっている。そればかりか、貧しい人には診察の折、パンや小麦粉・卵や衣類までそと上げていたという。こうした息の長い奉仕活動にアイヌの人々は心を許し、彼の家に集まってよもやま話をしたり、信仰や葬儀などに関わる秘儀について彼の取材や立ち合いを許したりしたという。とりわけ、女性が密かに身体に巻いているお守り紐(貞操帯)については、よそ者には絶対にその存在を明かすことはなかったであろう。マンローの妻・千代は、看護師であるとともに助産師である。彼女は献身的にアイヌの女性たちの出産に関わり、絶大な信頼を集めていたから、その事実を知り得たのである。それらの成果は、マンローの死後、ロンドン大学のセリグマン教授の末亡人が渡辺仁の協力を得て1962年に編纂・刊行している(『AINU Creed and Cult』→小松哲郎訳『アイヌの信仰とその儀式』国書刊行会、2002)。その詳細な記録を読んで、感嘆しないものは恐らくないであろう。もしこの記録が世に出ていなければ、古くから伝わる二風谷及びその周辺のアイヌの儀式・信仰・風俗等は忘れ去られてしまったかも知れない。

本書の著者・桑原千代子(1923~1986)は、もと小中学校の教師であった。医師の夫と結婚した直後、旅先で急性虫垂炎を患い、長野県の町立軽井沢診療所入院。そこで世話になった「婦長」(看護師長)がマンロー夫人であった。「婦長回診」で病室を訪れるマンロー夫人から昔話を

聞くうちに、彼女の夫であったマンローに興味を抱いたという。マンローの素晴らしい仕事ぶりに感動した桑原は、マンロー夫人に彼の伝記を執筆することを勧めたが、彼女は固辞し、「覚えていることは、みんなお話ししておきますから、私の代わりに書いて下さいませんか」とアドバイスされたのであった。ここから桑原の生涯をかけたマンロー研究が始まる。昭和26(1951)年のことであった。しかし、この仕事を本格的に始めようとした頃、桑原は四人の幼子を抱える「専業主婦」になっていた。彼女はあせらず、子どもたちの成長を見守りつつ、時機を辛抱強く待つのであった。

4人の子どもたちが全員小学校に上がったとき、桑原の「マンロー研究」が再開される。マンロー夫人との出会いから16年の歳月が経っていた。マンロー夫人・千代は神戸の姪の家に身を寄せている。それで夫に子どもたちを託し、一泊二日の強行軍で東京から神戸に向かったのがあった。この再会では、千代夫人から刊行されたばかりのマンロー遺稿集『AINU Creed and Cult』が桑原に供覧されている。そして、「私は、子供は産めなかったけれど、マンローの研究を一生懸命助けました。この本こそわが子です」と、頬と瞳を輝かせて語ったという。マンローは在日数十年というのに日本語は片言しか話せなかった。アイヌの人たちから聞いたことはすべて千代が通訳してマンローに伝えていたのである。まさにこの本は千代とマンローの合作というべきであった。桑原はこの本を理解するために、金田一京助門下の久保寺逸彦に師事することになる。久保寺には、桜井清彦が主宰する「アイヌ史研究会」にも連れていってもらい、金田一京助・渡辺仁・加藤九祐などの碩学からも知遇を得る。このほか、千代の「人名簿」に載っている多くの人々を訪ね、マンロー夫妻についての思い出話を聞いて回っている。世話になった人々の中には、八幡一郎・三上次男・芹沢長介・大塚和義・森浩一など著名な考古学者たちの名前も見える。マンローに関わる専門書もかなり読破したようだ。

桑原はマンローの功績について肯定的に記述しているが、私生活では手厳しい批判を加えた箇所がある。それは、マンローの四度の結婚・離婚に関する事項である。具体的内容は原典に当たって頂きたいが、著者は「(マンローが)自己の非をひた隠しにし、(離婚の)全ての原因を相手側に押し付けた不誠実さは快くない」と糾弾している。行く先々で、「四人も奥さんをとり替えたマンローさんがいやになりませんか」と尋ねられたという。それでも粘り強く桑原がマンロー研究に関わり続けたのは、やはり彼の、私財を投げ打って研究に没頭した情熱と、アイヌの人たちに向けた博愛主義に感動したこと、そして何よりも、「おばあさま」と慕った4番目の妻・千代の隠れた功勞の証を後世に残しておきたいという願望があったのではないかと想像する。なお桑原は、病を抱えながらの取材と執筆活動が災いしたのか、本書上梓の3年後に63歳の若さでこの世を去る。この本は、執念の大作であった。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第36回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第234回)	西垣 遼 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第11回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚「概説 韓国考古学」	石井一樹 …4

## 考古学の履歴書

## 考古学とともに歩む(第11回)

山本 暉久

## 11. 大学での考古学 その8

## —卒論の完成と大学院への進学—

大学4年生の夏、北海道方面の資料収集旅行を終えて帰京した。帰京後、すぐに櫻井清彦先生が団長となって調査を実施していた世田谷区総合運動場内遺跡に参加した。ところが、その参加初日に腕に発疹が現れ、「ここは蚊が多いのかな?でも痒くはないんだけど…」などと云っているうちに、その夜、発熱し、体温も40度近い高熱となってしまい、起き上がることもできず、救急車で運ばれて、近くの病院に2週間あまり入院する羽目になってしまった。当初は病名がはっきりしなかったが、全身に発疹が出て、結局、麻疹(はしか)にかかったことが判明した。そういえば、母親から「あなたは、子供のころ、はしかにかかっていないように思う」と云われていたので、合点がいくこととなった。それにしても、二十歳を過ぎて、はしかにかかると、その重篤さは並大抵ではないことを実感した。どうやら、北海道方面の資料収集旅行中に罹患したものらしい。暑い夏の盛り、まさか、入院する羽目になるとは思いもしなかった。

そんなハプニングもあったが、10月に入って、こんどは、東北方面へ資料収集旅行に出かけた。メインは、仙台の東北大学に芹沢長介先生を訪ね、新潟県中林遺跡の有舌尖頭器関連の資料を見学することであった。その当時、芹沢研究室は、日本の旧石器研究の牙城ともいべき存在であり、研究室の廊下には、早水台や星野遺跡のいわゆる前期旧石器関連の資料が山積みされていた。その時から、これが本当に前期旧石器なのかどうか、議論がされていたが、先生自ら、星野遺跡の珪岩製石器を手にとって、「君、わかるかい?これこそが本当に前期旧石器なのだ」と解説してくれたことをよく憶えている。いまは「偽石器」とする説が多いようであるが、先生の確信に満ちた“信念”を直に知ることができた。それは、1968(昭和43)年10月18日のことであった。

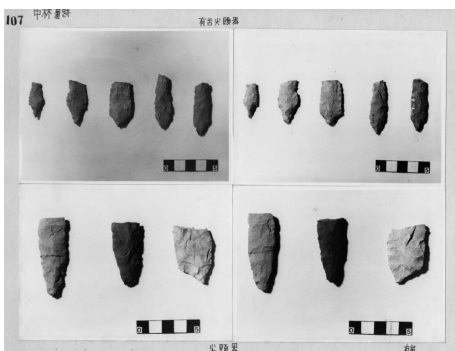
10月の下旬には、今度は、山形大学教育学部の柏倉亮吉先生の研究室を訪ね、高畠町の日向洞窟、一ノ沢岩陰、火箱岩洞窟遺跡出土の草創期資料や小国町横道遺跡出土の杉久保型ナイフ形石器などを見学した。このほか、新潟県長岡市の悠久山公園内に当時あった長岡市立科学博物館に中村孝三郎先生を訪ね、小瀬ヶ沢洞窟・室谷洞窟遺跡の草創期資料を見学した。

このように、関連する遺物を見学する旅行を積み重ね、その時撮影した遺物のネガをもとに、大学の文学部キャンパス内の通称「国連ビル」(今はない)内にあった史学科資料室の暗室を

借りて、それら遺物写真をすべてキャビネサイズに手焼きした。また、報告書等から遺物図面や分布図などを、丸ペンを用いてトレースしたものを含めて、B4版の台紙

に貼り付けて図版編を作成した(写真に図版編の一部を示した。新潟県中林遺跡出土の有舌尖頭器・東北大学考古学研究所所蔵)。今のように、原図をコピー(スキャン)したものを用いて図版を作成するのではなく、大変手間と根気がいるものであった。この図版編は、箱に入れて3箱となった。このような作業と並行して原稿執筆にとりかかり、提出期限になんとか間に合い、卒業論文が完成した。400字詰め縦書き原稿用紙で、1000頁弱にもなり、製本したら、全6分冊と大部なものとなった。タイトルは、「縄文文化形成過程の研究」とした。先石器(旧石器)時代終末期～土器出現期までを扱ったもので、細石器文化、神子柴・長者久保系文化、有舌尖頭器文化、草創期前半の土器群(隆起線文・爪形文・押圧縄文土器)～捺糸文系土器・押圧文系土器への変化と北方系文化として石刃鏃文化を研究の対象としたものであった。今思うと、内容はともかく、あの卒論にかけたエネルギーは、並大抵のものではなかった。やはり、考古学を目指して大学に入学して、その集大成としての卒論をまとめてみたかったという気持ちの表れであったように思う。後年、大学の教員として、多くの学生たちの卒論や修論の作成を指導することとなったが、いつも学生たちに云ってきたのは、考古学は“モノ”(遺構・遺物)を直に見(観)ることの大切さであった。その点、今も、その基本的な姿勢に変わりはない。

かくして、卒論の執筆を終え、では、この先どうするかということになったわけであるが、大学院修士課程へ進学することには迷いはなかった。問題は、その進学先をどうするかということであったが、早稲田大学では、卒論で扱ったようなテーマを今後とも追求することは不向きに感じたし、それと当時、なぜか、考古学の学生は、日本史学専攻への進学が拒まれていたというか、認められず、しかたなく美術史専攻へ進学するのが通例であった。そんなこともあって、櫻井先生の勧めもあって、某大学の大学院を受験したものの、あえなく不合格となってしまった。それで一年間浪人生活を送り、翌年再チャレンジしたものの、またも失敗し、結局、早稲田大学大学院に進学することとなった。進学先は、大学院文学研究科修士課程・芸術学専攻(東洋美術史)であった。もちろん入学試験はあるわけで、あいにく美術史関連の専門知識は皆無に等しく、語学(英語とドイツ語の2カ国語で受験)はともかく、専門試験の方は惨憺たる結果ではあったが、櫻井先生の強力な推しがあったというか、それしかないと思うが、なんとか合格することができた。1970(昭和45)年4月のことであった。



▲卒論図版の一部 新潟県中林遺跡の有舌尖頭器

## 略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英次記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。



## リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 234

### 史跡 尼寺廃寺跡 ～奈良県香芝市

西垣 遼

香芝市は、奈良県の北西部に位置する。尼寺廃寺跡は、飛鳥時代に創建された寺院跡である。約200m南に所在する般若院境内でも古代寺院跡がみつかっており、北側の寺院跡を尼寺北廃寺(史跡尼寺廃寺跡)、南側の寺院跡を尼寺南廃寺と称す。周辺では、7世紀前後の遺跡が多く、本廃寺にも瓦を供給したと考えられる平野窯跡群のほか、史跡平野塚穴山古墳を含む平野古墳群など7世紀における生産遺跡、古墳、寺院が密集する地域である。

#### 尼寺廃寺の概要

尼寺廃寺は、昭和7(1932)年に地元の古瓦収集家の保井芳太郎氏(1881-1945年)によって報告される。そこには、南北約200m離れた位置に土壇があることやその周辺で瓦が採集されることなどが報告される。そのため、報告された当時の段階では、両廃寺で軒瓦が共通することを根拠に、元々北にあった寺が南へ移ったためであろうと推測された。しかし、周辺の地形では両廃寺のほぼ中央に谷筋が存在し、谷筋周辺で瓦がほとんどみられないことや発掘調査で谷筋に沿った河川跡が検出されたこと、堂宇が同時併存していたことなどから、北から南へ移転したのではなく、近接した位置に2カ寺建立されたことが推測された。近接した位置に2カ寺存在する場合、飛鳥寺(僧寺)と豊浦寺(尼寺)、斑鳩寺(僧寺)と中宮寺(尼寺)のように、一方が僧寺で他方が尼寺の可能性が考えられ、尼寺北廃寺と尼寺南廃寺も僧寺と尼寺の関係であったとみられる。

#### 発掘調査の概要

尼寺廃寺跡は、周辺の開発進行によって、遺跡の範囲確認の必要が生じ、平成3(1991)年度から発掘調査が続けられるようになった。平成7(1995)年度には塔基壇の発掘調査がおこなわれ、現存するものとしては全国最大の塔心礎(約3.8m)と各種出土品(耳環12点、水晶玉4点、ガラス玉3点、刀子1点)

がみつかった。心礎上面から耳環をはじめとする各種の出土品が見つかるのは、飛鳥寺、中宮寺、四天王寺で確認されている程度で、きわめて稀有な事例である。塔心礎の中央にある柱座の四方には添柱用の柱座が穿たれている。同様のものは大和において法隆寺若草伽藍などに限られている貴重な事例である。塔心礎そのものは理由は不明瞭であるが真ん中で2つに割れており、割れた部分を凝灰岩等で柱座部分の形に合わせて丁寧に加工し、組み合わせている。

塔基壇は良好な状態で残っていたことから、基壇構築の過程が明瞭で、塔基壇構築方法が土層から判明した。その後、塔跡の北側で金堂跡が確認され、南側に門がなく、東側に門があると想定されたことから、中心伽藍は、北に金堂、南に塔が配置され、その周囲を東に中門が設けられた回廊が巡る、東面する法隆寺式伽藍配置と考えられるようになった。これらの発掘調査成果によって、平成14(2002)年に国史跡に指定される。

#### 整備と活用

平成14年の史跡指定後、平成15(2003)年度から順次、史跡の公有化をすすめた。平成19(2007)年度から史跡整備工事を開始した。指定地の南北を市道が通っていたため、平成24(2012)年に市道を付け替え、平成25(2013)年度から、建物基壇の復元や遺構表示、公園内の芝貼りや植栽、説明板の設置、駐車場の工事などを順次おこなった。塔基壇上の礎石には保存処理を施したうえで露出展示をおこない、塔心礎は陶板等による復元展示をしている。平成28(2016)年度には、史跡に隣接して尼寺廃寺跡学習館を開館し、館内には塔基壇の土層剥ぎ取り部分の展示と日本最大級の塔心礎復元模型及び塔心礎上面出土品の復元模型を合わせて設置している。

史跡尼寺廃寺跡は、香芝市教育委員会が管理している。公園の草刈り業務はシルバー人材センターと文化財担当職員が行っている。尼寺廃寺跡学習館は、月1回、二上山博物館のボランティア団体によって学習館内の清掃が実施されており、維持管理に大きな役割を果たしている。

尼寺廃寺跡学習館では、歴史愛好家以外の来館を誘致する目的で、香芝市民図書館等と協力して、体験学習に合わせた関連する図書の展示を企画している。こうした図書の展示は、園児や親子でも参加しやすいと好評である。また、この施設を拠点に歴史講座やウォークイベントなどを開催し、市内外から参加者を募っている。付近の小学校や市内の園児が遠足などで訪れる他、歴史学習だけでなく公園としての利用もされている。整備まで多くの出来事があった尼寺廃寺跡であるが、整備後の様子を是非とも多くの方々に訪れてほしいと思う。

#### 引用文献:

- 香芝市教育委員会2003「尼寺廃寺I—北廃寺の調査—」 香芝市文化財調査報告書第4集
- 香芝市教育委員会2016「尼寺廃寺II」 香芝市文化財調査報告書第16集
- 香芝市教育委員会2016「史跡尼寺廃寺跡—保存整備事業報告書—」

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは岡島永昌さんです。



▲尼寺廃寺跡史跡公園(手前:中門、左:塔跡、右:金堂跡)



▲復元整備された塔基壇

▲塔心礎上面出土品

## 考古者の書棚

## 「概説 韓国考古学」

韓国考古学会編、武末純一監訳、庄田慎矢・山本孝文訳／同成社(2013) 石井 一樹

大学生の時に歴史に関する講義を受けた中で、一番興味を持ったのが考古学であった。私が通っていた大学では、1年生の秋ごろにゼミナール選択を行う。考古学のゼミナールに入ることはすぐに決めることができたが、1つだけ頭を悩ませる問題があった。それは、日本考古学と東アジア考古学の2種類のゼミナールが存在するという点であった。考古学に触れてから1年も経っていないことから、東アジアという外の世界を学ぶより、身近である日本考古学を学ぶことが必要であるとはじめは考えていた。ただ、立ち止まって考えると日本考古学を学ぶ上で東アジアという地域は切り離せない関係であることに気がついた。それならば、一度東アジアの視点から学ぶこともおもしろいのではないかと考え、東アジア考古学を専攻することに決めた。2年生になり、ゼミナールの最初の授業で講義内容の説明があった。その内容というのが、1冊の著書を学生で分担して、内容を発表するという点であった。私が韓国考古学についてはじめて詳しく触れた著書を今回紹介する。

紹介する著書『概説 韓国考古学』は、韓国考古学会によって執筆され、その内容を翻訳したものである。この著書の原題は『韓国考古学講義』であり、18人による研究者によって執筆されている。第1章から第8章及び付篇で構成されている。第1章では総説として、韓国考古学の歴史・現状・展望についての内容が書かれている。第2章から第8章は時代ごとにわかれて執筆されている。第2章から第8章の内容としては、概観、遺跡、遺物の3つについては必ず書かれている。その他に時代によって特筆すべき点をまとめている。第6章 原三国時代、第7章 三国時代、第8章 統一新羅と渤海の内容を解説している。第6章では、原三国時代の北部地域、中部および西南部地域、東南部地域にわけてそれぞれの特徴を解説している。第7章では、三国時代の中心であった高句麗、百濟、新羅以外にも栄山江流域と加耶について解説をしている。第8章では、タイトル通り統一新羅と渤海について解説している。付篇では、中・近世考古学の現状と展望について、高麗および朝鮮を解説し、今後の研究の活性化に期待している内容となっている。

さらに最初の数ページにおいて、各時代・地域を代表する遺物の写真がカラーで掲載されていることから、韓国で出土する遺物の特徴が一目でわかる内容となっている。また、解説文だけでは理解が難しい内容に関しては、図や写真が掲載されており、理解を深められる内容となっている。

この著書は「概説」と書かれている通り、韓国考古学の概説書である。今回、数多くある韓国考古学の概説書の中で「概説 韓国考古学」を紹介した理由について3点あげ、紹介をする。

1点目は、時代ごとにわけられた章の最後に参考文献が書かれているからである。自分が研究したい時代について、章の

後ろを見ればすぐ参考文献を探すことができる。この著書を読み、大まかに韓国考古学について学ぶことができたのであれば、次のステップとして、自分が学びたい研究テーマを決める必要があり、さらに詳しく学ぶ際には、多くの参考文献を探すことが重要である。これが意外に難しかったという記憶がある。少しでも参考文献を簡単に探す手助けをすることができる一冊ではないだろうか。

2点目は、写真や図が多いことにある。著書を開くとほとんどのページで写真または図が掲載されている。考古学はモノをみる学問であるため、実際に遺跡を訪れることや遺物をみることが重要である。ただ、日本に住んでいる中で、韓国の遺跡や遺物を実際にみることが、費用が多くかかることや時間がかかるため学生にとっては難しい問題である。この著書では、文章のすぐ横に写真や図があることから、イメージがしやすく韓国考古学を身近に感じることができるのではないだろうか。実際に私もゼミナールで読んだ際は、写真や図をみることで韓国考古学をさらに詳しく学びたいという意欲がわいたものである。

3点目として、旧石器時代から中・近世考古学の幅広い時代をこの一冊で学べる点にある。韓国考古学の中心となるのは、やはり旧石器時代から三国時代だと考えられる。しかし、この著書は三国時代以降の統一新羅、渤海、高麗、朝鮮まで詳しく解説されている。私は青銅器時代を学ぶことに最終的には決めたが、どの時代を研究テーマにするのかとても悩んだ記憶がある。研究テーマを決める際に少ない選択肢ではなく、多くの選択肢の中から選ぶことにより、実際に自分自身が学びたい時代・地域をみつけることのできる一冊である。

『概説 韓国考古学』を大学2年生時に出会えたことにより、卒業論文のテーマを決める際もこの著書を読み、自分自身が一番学びたいことを選択できた。さらに卒業論文の内容をより詳しく学びたいという考えから大学院まで進学し、現在考古学という仕事に携わることができている。

日本に住んでいることから、まずは日本考古学を学ぼうとする学生が多いのではないだろうか。その学び方も間違えではないが、一度、日本から東アジア世界をみるのではなく、外から日本の歴史を学ぶことで新たな発見をみつけることができるのではないだろうか。これから韓国考古学を学ぶ人にぜひ読んでほしい一冊であり、自分の研究テーマを決める際の手助けとなれば幸いである。

## アルカ通信 No.241

発行日 2023年10月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL:0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL: http://www.aruka.co.jp